

は発熱しなくなりました。完治したのだと思います。

現在思うと充分長生きしたと思います。青春の一期に軍隊へ行き、戦争という悪夢を見ましたが、わずかな時でしたが、二度と戦争の無きことを望み、多くの戦没者の泰らかな眠りを祈っています。

大陸「湘桂作戦」に参加して

愛知県 清水辰夫

私の家族は父、母、私と妹の六人、第二人の一人の大家族で家業は米穀商でした。

昭和十七（一九四二）年三月の徴兵検査で第一乙種となり、昭和十八年四月八日、氏神様の社頭で武運長久の祈願をし、半田駅を歓呼の声に送られ、東海道線を西に姫路の野砲兵第五十四連隊補充隊に同郷のS君と共に入隊しました。

播磨平野に浮かぶ白鷺城を望みできるこの兵舎で、ラッパによる生活が始まりました。入隊後、我ら初年兵は内地で教育されるのではなく、南支派遣「鳳兵団」野砲兵第四連隊の要員として広東に向かうためいったんここに入隊したのでした。輸送船待ちの一カ月余は、被服・帯剣受領・身体検査・予防接種・軍歌演習・訓話・号令調整・各個教練・乗馬練習等基本的な訓練が主なもので

した。

五月十五日、雨もよいの日、留守隊が整列して見送ってくれる中を駅へ向かいました。広島旅館に三泊、宇品から乗船、七、〇〇〇トンの「ウスリー丸」は船倉が二段に仕切られ、立てば頭がつかえる有様でした。

僚船は六隻と教えられました。夜のとばりが降りる頃に船団は動きだしました。五月十八日でした。夜光虫の光る南支那海を船はジグザグに進み、救命胴衣の着脱、対空・対潜監視を続けること一週間、船は台湾の高雄港に投錨しました。

船の荷役に二十四時間、上官の少ない初年兵の集団は誰からともなく、船の側に集まる台湾の民船からバナナや砂糖を買いました。飯盒に金を入れて舷側から吊り下げて買うのです。これは旨かったです。腹いっぱい食べて満足しました。

そこで抜錨、香港・九竜を目差して航海が続きました。見馴れないジャンクの姿、多くの島々、かもめ等が飛び交い慰められました。視界にビク

トリアピークが入ってきました。マストや煙突を半分水面上に出した艦船の残骸も見られ、過ぎし日の香港攻略戦の様相が偲ばれる風景でした。

黄埔の土を踏み締めたのは、昭和十八年五月二十八日でした。広九線で広東へ、さらに広州西駅より小坪駅へ行きました。

第二十三軍第四師団野砲兵第四連隊第九中隊第一小隊第一班に配属となり。鶴辺にある砲兵の兵舎に入りました。

野砲の一個中隊は本部三十人、第一小隊二十四人、第二小隊二十四人、段列（輜重）三十七人、計百十五人。各小隊に山砲が一門ずつあります。

内務班は三年兵が大坂出身、二年兵は名古屋の出身で、昭和十八年七月一日に編成替えがあり、六個中隊となり私は第六中隊（富満隊）となりました。間もなく大阪の兵隊は満期徐隊となり故国に帰って、十六年徴集兵が主力となりました。

私達初年兵は訓練途中で全員腹具合がおかしくなってきたので、検査の結果、疑似赤痢と診断さ

うより、ただついて行くと行った方が實際を表現できるかと思う。

雨こそ降らないが曇り空に、道路は沢のように泥が流れている。夜はわらの上に寝ました。そしてシラミに苦しむ毎日でした。

兵も馬もバシヤバシヤ、足はふやけて痛さを通り越して、何の感じもない。誰も一言もなく、ただ黙々と歯をくいしばって歩くのみで、必死でした。

前の方で何かザワメキ始めた。宿営地へ着いたらしい。皆急に元気になります。中には今まで足を引きずりながらいた者が急に人が変わったように飛び回ります。しかし早速、宿営準備です。先ず馬に水飼いで、我々野砲隊は馬様々です。またそれだけ忙しい。夕食はどうして食べたか思い出せないほどでした。

編上靴の中で足がふやけて出ない。靴紐をいっぱいに広げてソートと脱ぐ。靴下をはぐようにめくる。「痛い！」思わず口から出る。足の所々に血

山また山、道なき道を汗と泥にまみれて馬と共に命ある限りの行軍で、正にただ精神力あるのみでした。

訓練や演習であればどんなに辛くても時間が経てば終わりがあるのですが、戦場では終わりがありません、思い出してもよくぞ生きて帰れたと思っております。

広東に戻り、昭和二十年六月二十一日には陸海豊地区の警備になり、米軍上陸に備えて、海岸近くの岩山に陣地を構築することになり、昼夜兼行で洞窟を掘り始めました。

岩山を掘るには「ノミ」が必要です。先ず部落へ行き、住居の窓格子の鉄棒を徴発し、数十本持ち帰り、何度も火造り、鍛練で「ハガネ」のようになったものを「ノミ」として使用しました。一日五十センチから一メートル位掘れました。そして「わら」の上に天幕を敷いて、寝泊まりしての作業で「シラミ」が下着にビッシリ湧いて大変でした。

がにじんでいる。足の裏には豆ができていて水がたまっている。針で刺して水を抜いた後にヨーチンを浸した糸を通す。「アッチチ」悲鳴が……。作戦中に食糧調達に行った者が油を持ってきて、早速テンプラの御馳走になったが、夜中に全員腹下して大騒ぎになったことがありました。どうやらテンプラ油と思ったら、なんと桐油だったそうです。

昭和十九年八月九日から十二月九日までが第一期湘桂作戦で、続いて昭和二十年二月二十八日までが第三期作戦と続きました。しかし在支米軍機の襲来が烈しくなり、昼間は動きがとれなくなり、連日夜行軍の強行で敗色が濃くなってきました。

柳州攻略後、反転となり、西江に沿って広東に向かい、夜行軍の連続でした。昭和二十年の正月は四会に駐留して餅を搗いてささやかながら正月気分を味わうことが出来、嬉しかったものです。

我が第六中隊の戦友の壮烈な戦死を目の当たりに目撃したり、行軍中の脱落や戦病死など、我々も

そのうち丸太をくり抜いて「ふいご」を造り、昼夜兼行で掘り進みました。砲の据付けを目前にして突然「異動命令」が出て、これまでの努力も水の泡となつてしまいました。

そして八月十五日、停戦を知らされ、呆然自失、なすところを知らずとはこういうことでしょうか。続いて武装解除で菊の御紋章を削り取るのに大童^{わらわ}でした。

終戦後、冷水坑に駐屯していた時、下士候で南京の学校へ行つた佐原伍長と佐野伍長が十九年兵の引率で共に中隊に合流しました。

九月始めに武装解除が行われることとなり、兵器、弾薬等の軍需品のすべてを引き渡し、完全な武装解除部隊となつて支那軍の命令のまま捕虜生活に入ることとなりました。十一月初めころ、中国軍に護衛されて冷水坑を出発し、途中で露営をしました。護衛の支那軍は、その服装が悪くヘナヘナの軍服でズック靴と云う姿であり、このような軍隊に敗れたのかと思うと断腸の思いがしまし

た。次の日の午後集中前前の広場で、身体検査を受けた後、矮陂の各部隊に分散して収容所に収容されました。

支那軍からの給与は非常に悪く、細長い米の「おも湯」をすすっていました。腹が減るので乏しい所持品との物々交換で給与の不足を補っていました。時々支那側から道路工事の要求があり、各中隊が交替で出掛けて道路工事を行いました。

年が明けて二月十二日、矮陂の集中営を出発し、復員船の乗船地の虎門へ向かいました。惠州、樟目頭を経て行軍しましたが、行軍間の給与はほとんど支給されず、食料は皆無で、空腹のため行軍速度はでず、しかも支那軍よりは行進を督促されるという苦しい行軍でした。途中の宿営は露営で、夜露をしのぐこともできない状態で、体力の消耗は激しいものでありました。

約一週間で虎門近くの北棚村に到着、船待ちの生活に入りましたが、矮陂以上の苦しい生活でした。田の畔の小穴を探って蟹や蛙を探して食べた

とうとう九州の東へきたと聞いたのですが、まだ一面に海原です。四国沖から紀伊半島沖を通過し伊豆半島沖を通過、九日の夕方、浦賀に投錨しました。翌十日に広東地区引揚船にコレラ患者が出たとの報があつて予防接種を受けることとなりました。

復員時の記録

昭和二十一年四月二日二時、乗船完了。日本船員の細部の注意によつて事故なく、十七時三十分、香港・九竜間を通過、ここここに爆撃で沈んだ日本の艦船を見ました。

四月三日 暴風雨警報出る

四月八日 夜明け。左舷に祖国の山々見える。

十八時潮岬沖通過。

四月九日 昨日からずっと陸地を左舷に望見。

十七時、待ちに待った浦賀港に到着。

上陸は明日の予定。

四月十日 日本船より先に到着した広東から来た船でコレラ患者発生、そのため本船も上陸

り、残りの実の落花生を抜いて食べたり、あるいは中国の農家で仕事をしてわずかばかりの甘薯を貰つて空腹をしのいだものです。

輸送船の入港が遅れたのと乗船順序の変更によつて乗船が遅れて、乗船待機期間が約一カ月にも及びました。三月末にようやく乗船命令が下りました。四月一日、虎門よりリバー型輸送船V88号に乗船しました。ぎつしり詰められて座ったままで全く余裕がない船内でも嬉しい話し声が聞こえてきました。

輸送船は翌二日に出帆し、香港、九龍を間近に見ながら通過しました。乗船したばかりの時はこんなに人が詰まつていても苦にならなかつたのですが、時間が経つにつれて体のやり場に困り、横になつたり座り直したりして、少しでも楽な姿勢にならぬものかと苦心しました。台湾海峡を通過中は波が高く海が荒れて船は大きく揺れ、船酔い患者が多く出ました。そして半数位は静かに寝ている、食事と便所へ行く以外は起きません。

禁止となる。四千人のうち千五百人の患者の由。

四月十八日 暴風雨警報により本船は横浜沖に

回船し投錨。

四月十八日 五時、横浜沖より揚錨、浦賀沖に

回船、十時上陸開始、十四時上陸完了。

四月二十日、半田駅に下車し帰宅しました。

三年振りの我が家は家族全員無事でした。帰宅途中、車窓より空襲で全壊の中島飛行機工場跡を見て、内地でも戦地同様だったのだと痛感しました。